

シンポジウム「大阪の個性・文化資源を見つめなおし、まちづくりに活かす」

主催：公益財団法人都市活力研究所

後援：大阪市、大阪商工会議所、公益財団法人関西・大阪 21 世紀協会

日時：2016 年 10 月 21 日（金）15 時～17 時 45 分

会場：AP 大阪梅田茶屋町 H.I.J ルーム

登壇者：公益財団法人山本能楽堂 事務局長 山本 佳誌枝 氏

千島土地株式会社 代表取締役社長 芝川 能一 氏

大阪府江之子島文化芸術創造センター 館長 甲賀 雅章 氏

コーディネーター：関西学院大学総合政策学部 教授 角野 幸博 氏

講演 1 「ようこそ！能楽堂へ」

公益財団法人山本能楽堂 事務局長 山本 佳誌枝 氏

山本能楽堂の山本佳誌枝です。私どもは谷町 4 丁目にある木造の古い能楽堂を中心に伝統芸能の普及と継承に努めています。昭和 2 年、現在地に主人の祖父の山本博之が創設しました。山本家はもともと京都の五大両替商の一つで祇園祭の鈴鹿山を寄贈したりしていたのですが、友人の借用手形の保証人になって全ての財をなくし大阪にやってきました。そして趣味だった謡曲を生業とすべく能楽師となり能楽堂を建てました。当時、能楽は「紳士のたしなみ」として人気があり、自分たちの「社交場」を作ろうという皆様方のご援助でできました。田村駒治郎さんや松下幸之助さんなどから力添えいただいたという資料が残っております。

しかし、最初の能楽堂は大阪大空襲戦争で一度焼けまして、昭和 25 年に瓦礫の中から再興しました。その時も全てが無くなりましたが、船場で大きな商社をされ、松竹ロビンスのオーナーでもあった田村駒次郎さんなど多くの方に支援いただきました。そのまま 60 年ほど維持していましたが、平成 18 年に国の登録文化財に登録され、それがきっかけで建物の価値に気がつき、国の初のモデル事業として 3 年間の改修工事をさせていただきました。改修工事では本当に多くの方々にご支援いただきました。改めて感謝申し上げます。

建物は木造 3 階建てで、再建当時の姿そのままになっていますが、床暖房など新しいテクノロジーが加わりました。舞台照明はカラーLED を使用し、1670 万段階の色がつけられます。また、3 階にライブラリーをつくり、大阪の芸能、文化の歴史を保存し、活用していただけるように京都造形大学の田中圭子先生と学生さんたちと資料のアーカイブ化を進めています。改修は大変でしたが、場がしっかりしたお陰様で、改修後は新しくいろいろな事業を進めさせていただいています。

「初心者のための上方伝統芸能ナイト」公演は今年でちょうど 10 年を迎えます。大阪に伝わる能、狂言、文楽、落語、講談、上方舞、浪曲、女道楽などの面白い部分だけを 15 分ずつ次々にご覧いただき、間に体験コーナーも設け、古典芸能の魅力を知っていただく。

いわばデパ地下の試食コーナーのように、気に入っていただいたら繁昌亭、文楽劇場に行って本格的な公演を見ていただけたらと思っております。

大晦日の年越し公演も10年目になりますが、アルコール付きで抽選会もあって大変楽しいイベントとなっております。大阪商工会議所、大阪市、大阪観光局が共催に入っているため、ご指導いただき、インバウンド対応もずっとやっています。2008年から4か国語の字幕をつけ始めました。全てを英語でやってみたらということで100回記念のときにネイティブの方が英語で司会、落語や講談などを英語で、能、文楽など英語にできないものは英語の字幕という公演を実験的にを行い、好評でしたので、現在は年間5公演程度実施しています。また、大阪府市のアーツカウンシルの平成27年度芸術文化魅力育成プロジェクトの業務を受託し中央公会堂で同様の公演を行い、多くの方に初めて古典芸能に親しめたと喜んでいただきました。さらに、それが元になって大阪市の交通局から依頼を受けて、本町駅に芸能のポスターを何か所か提示させていただいています。

昨年、真田幸村をテーマに新作能をつくり、幸村をテーマにした文楽と講談、落語と一緒に楽しんでいただく公演を大阪歴史博物館、大阪城、大阪城証券取引所で開催しました。

私どもの活動の特色として現代美術家の方と一緒に公演に取り組んでいます。例えば「アートによるこどもための能案内」は、現代美術家の方が能の中で面白いと思われたところを造形遊びにして、子供たちが楽しんだあと、みんなで一緒に能を鑑賞いただくというものです。例えば昔から日本人は松に神様が宿ると考えていますが、能は神様に捧げるための芸能なので、舞台の鏡板には松が描かれています。その鏡板の松を子供たちがつくってその中でお能を見る。2年ほど前に始めましたが、文化庁の事業になって北陸や関東の学校を巡回し、今年度までに約2万人の子供たちがこのプログラムを体験したことになります。他に、こどもたちが、自分たちでつくった袴を着けて能の舞台を発表するなど他にもいろいろな子供向けの事業があります。学校の先生方に向けたワークショップ等もしております。その時、特別支援学校の先生から出たアイデアで、能の楽器をiPadで演奏できるアプリ「OHAYASHI sense i」を文化庁の事業として開発しました。どなたでも無料でダウンロードして楽しんでいただけます。

10年程前から、能の体験講座や能楽堂の建物見学会を実施し、大変人気を集め、海外、国内のいろいろな方に来ていただいております。能についてのお話をし、いろいろな体験をしていただく。茶道や生け花の体験などもあります。

また、平成16年より、大阪市内の公共空間で、その場に偶発的にいあわせの方に向けてのストリートライブ能公演を開始しました。八軒家浜などの水辺、公園などこれまでに大阪市内の約100か所で活動を続けてきました。能を見たことがあるのは人口の1%ぐらいという資料を見て、能楽堂でお待ちしているのではなく、皆さんの前に飛び出して行って見て興味を持っていただく、アウトリーチ活動で能に親しんでいただこうと考えました。セントレジスホテル、市役所の前、JR大阪駅の上、大阪府庁、阪急百貨店、御堂筋線の心齋橋駅などで上演しました。能だけでなく文楽も同じように紹介しました。大坂城に来られ

る観光客に向けて、大阪商工会議所と大阪観光局の指導で英語で上演したこともあります。「船場のお雛祭り」のイベントでは、毎年、芝川ビルに飾られたお雛様の前でリアル五人囃子の演奏をお楽しみ頂いております。

最近では水都大阪パートナーズのご協力により、北浜の平和不動産ビルのテラスで能の公演をしました。対岸で能や謡を教えるワークショップをして、ちょうど大阪府のマスコットキャラクター・もずやんのお誕生日でしたので、秀吉も演じたと言われる高砂を演じ、船に乗ったもずやんを対岸の皆さんと一緒に謡をうたってお祝いしました。

平成 21 年に開催された「水都大阪 2009」では、最終日を彩るイベントとして、新しくできた八軒家の川の駅で、新作能「水の輪」を初演しました。汚れてしまった川の水を水鳥扮する大勢の子供たちが掃除をすることで大阪の川、水がきれいによみがえり、水の神様が現れて大阪の繁栄を寿ぐというものです。3000 人ぐらいの人が来てくださりまして本当に驚きました。これまで 15 回、ブルガリア、淀川の源流の近江八幡、中之島ゲートなどいろいろな所で再演させていただいております。去年は小豆島、屋久島、隠岐ノ島でその土地の歴史、文化、産業を取り入れた松を子供たちがつくってその前で上演しました。また、去年は、ミズベリングの世界会議でも上演し、平成 27 年度芸術文化魅力育成プロジェクトとして現代美術家のやなぎみわさんのステージトレーラーをお借りして、ポールダンス、クラシック、講談と一緒にジャンルミックス Ver. の公演もしました。今年の 11 月には東京オリンピック、パラリンピック競技大会の機運醸成の試行プロジェクトの 27 事業の 1 つとしてグランフロント大阪のナレッジプラザで公演させていただきます。五輪カラーの松を全国の学校の約 2000 人の子供たちに描いてもらってその松の中で上演する予定です。水鳥役としてインターナショナルスクールに通う約 15 か国の子供たち約 25 人が出演します。また、実験的にスマートフォンで字幕を配信するという試みにも取り組みます。新作能「水の輪」の公演を通して「水を大切にする気持ち」で世界をひとつへとつなぎ次の世代に美しく豊かな水を伝えていく一助となればと思っています。

また、ありがたいことに約 8 年間、毎年のように海外で公演をさせていただいております。去年はブルガリアで現地のブルガリア人 10 人が、能の稽古を重ね、能「紅葉狩」に出演するという新しい公演を実施しました。国民的人気の女優の方も出演し、ブルガリア国内で大変大きな話題となりました。これまでの海外との国際文化交流の取り組みが認められ、大変名誉な国際交流基金の地球市民賞をいただきました。今年は 6 月にヨーロッパの 3 大演劇祭の 1 つであるシビウ演劇祭に能として初めて招へいを受け、「安達原」を上演し、喝采を受けました。

数年前から、観光庁が提唱するユニークベニューとしての活用も始めさせていただきました。ユニークベニューはホテルとかコンベンション施設ではなく美術館、博物館などその土地のちょっと面白い場所をおもてなしに活用して行こうという取り組みです。2 年前には、タイ首相夫人が来られて、日本料理、能の公演、茶道、生け花の体験など日本文化の粋を凝縮して、おもてなしさせていただきました。都市活力研究所の Hack Osaka という世

界の IT 関係者の方々が来られるイベントでは、2 年続けて前夜祭のレセプション会場として、お食事お楽しみ頂いた後、能の公演・ワークショップを行い大変ご好評をいただきました。他にも、建物全体を生け花で飾るなどいろいろな活用をしています。

大阪中央区主催の「船場を遊ぼう」という今年で 4 年目のイベントは、船場に残る芝川ビルなど歴史遺産である近代建築と伝統芸能を掛け合わせてまちの魅力を知っていただくという取り組みです。このイベントでは私自身も、船場の歴史を学ばせていただき大阪のまちのポテンシャルの高さを再認識しております。芝川ビルで開催する「船場アカデミー」は、昔ここが花嫁学校だったことに由来し、各界の方にご協力いただき、本物の講師による一流の教養講座を開催させて頂いております。大変人気の高い教養講座で、今年は 2 講座増やして 10 講座する予定です。また、講談の魅力で船場の歴史を伝えるため、船場の老舗経営者の会社の歴史、広岡浅子物語、マッサンの国産ウイスキー誕生秘話などをつくり、ご好評をいただいております。

山本能楽堂は登録有形文化財ですので、建物に興味のある方に向けた「生きた建築ミュージアム」にも去年から参加させていただきました。さらには、「We Noh」というアニメーションを使用したアプリの開発、上方伝統芸能紹介の DVD の制作、照明デザイナーとの取り組み、現代演劇とのコラボレーション、デザイン集団 graf によるポータブルの能舞台の制作などいろいろなことをやっています。

大阪は汚い、文化度が低いというステレオタイプ化されたイメージが多いのですが、本当の大阪は上質で文化度の高いまちだと思っています。そういう魅力を少しでも発信できればと思っています。

講演 2 「不動産の創造的活用～船場と北加賀屋での実践」

千島土地株式会社 代表取締役社長 芝川 能一 氏

千島土地の芝川です。今日は芝川ビル、名村造船の活用、ラバーダックの 3 部構成でお話したいと思います。私どもの会社は明治の最晩年に設立されています。資本金が非常に少なく、社員も 28 名と少人数で、土地賃貸と建物賃貸の事業をしていましたが、私の代になってから航空機の賃貸事業と今日お話しする地域創生・社会貢献事業に積極的に取り組んでおります。

芝川ビルは、先々代の芝川又四郎によって昭和 2 年に建てられました。又四郎が関東大震災の惨状を見て、火災に強い造りとし、第 2 次世界大戦の空襲にも耐えて残りました。戦後は事務所中心のテナントビルになっていたのですが、2005 年に芝川ビルで開催された「近代建築オーナーサミット」というシンポジウムで周辺の近代建築所有者の方々と意見交換させていただいた際に、皆さんがご自身のビルに非常に愛情を持って活用されていることを知り、芝川ビルも、その建物の魅力をきちんと生かす形で再生に取り組むことを決意しました。

まず、建物竣工当時の写真などの資料から、戦後、無秩序に増築、改修された箇所をで

きるだけ元の状態に戻す工事を行いました。さらに、より多くの方にビルにお越しいただけるようにと、従来の事務所テナントから店舗テナントへの移行を進めました。店舗選びは女性の担当者にまかせて女性の感性、視点で選んでもらうようにしています。お陰様で大変魅力的な店舗が多数入居され、建物の魅力と店舗の魅力の相乗効果で、近年では大阪を代表する魅力的な近代建築の活用事例と言っただけのようになりました。

また、屋上テラスのある 4 階は貸スペースとして運営しており、会議や撮影、展示会、パーティーなど様々な用途でお使いいただいているほか、地下 1 階のレストランによる夏期限定のビアガーデンや、年 2 階のマルシェイベント「芝川 ichi」の開催など、自主企画のイベントもご好評をいただいております。

2009 年からは近隣の 6 棟の近代建築で「船場近代建築ネットワーク」を組織し、情報交換や情報発信も行っています。こうした近代建築同士のつながりをベースにまちづくりのネットワークが広がり、ひな祭りの時期に船場の旧家の雛飾りを公開する「船場のおひなまつり」や、秋の建築公開イベント「生きた建築フェスティバル」などもスタートしました。従来、北船場はオフィス街で、土日は寂しいまちだと言われておりましたが、この 10 年で多くの方が週末にまち歩きを楽しまれるようになり、随分とまちの様子も変わりました。

次に名村造船所跡地についてお話しします。戦後間もない頃は四つ橋線の北加賀屋駅から造船所までは沼地でその後、埋め立てられました。昭和 40 年頃の北加賀屋は造船で栄えました。旧名村造船所のドックの長さは 200m 強です。88 年から 89 年にかけて名村造船所が土地を返すということになりました。当時、借地が返ってくることは稀有で現状の姿で返還を受けました。

このエリアはしばらく暗闇の時期を迎えます。ここに新たな血が注がれたのが 2004 年で NAMURA ART MEETING というのを始めました。京都の三条で劇場をやっていた小原さんとの雑談の中で「何もなく人っ子一人いない夜真っ暗なエリアがある」と言うと、彼は可能性を見つけて「こういうことをやりたい」と申し出てきました。当時、私個人としてはアートとか文化に全く関心がなかったのですが、とりあえず何も使っていないからやってみようということで始めました。当時、(扇町ミュージアムスクエアや近鉄小劇場等) パフォーマンスをする場が閉じられていったので、少し長期的に取り組む場を考えてくれないかということで 30 年間、2004~2034 年まで無償で提供する約束でスタートしました。常時情報を発信していく必要があるだろうということで、2005 年に常設のイベント会場とし「クリエイティブセンター大阪」という名称にしました。先ほどユニークベニューという言葉は初めて聞きましたが、実際に稼働していた工場の跡地が会場に提供されることはなかなかないと思います。地元のイベント、演劇などいろいろな方に使っていただいております。

名村造船所跡地のクリエイティブセンター大阪を核として北加賀屋エリア全体に展開を図っています。北加賀屋クリエイティブ・ビレッジ構想ということで 2009 年頃から積極的に取り組んでいます。借地人から返してもらった空き家をクリエイターに安く貸す。現状

回復義務を免除して自由に直してもらっていいということでやっています。一つ目は「AIR 大阪」、アーティストインレジデンス大阪という名称で、ここに来たアーティストたちが暇な時間に手弁当でどんどんリノベーションが進みました。現在は AIR OSAKA HOSTEL ということで外国のバックパッカーの方が増えています。次は家具工場の跡の「コーポ北加賀屋」。最初は二人の方が入り次第に自分たちと気の合った仲間を呼んできて、いまは結構全体としての発信力があるという事例です。次は2軒の長屋をぶち抜いた「ク・ビレ邸」、北加賀屋クリエイティブ・ビレッジのインフォメーションセンター的な役割をしています。これは私どもの方で改装して北加賀屋に移ってきた舞台芸術関係者に運営を任せています。千島土地は将来のことを憂いてまちを活性化しようとしていることを説明して地元の方の理解を得るといような役割を果たしています。「隠れ屋 1632 秘密基地」、手作り眼鏡で徳島の眼鏡屋さんが月の半分ぐらいこちらに来て注文眼鏡をつくっている。一人でコツコツつくっているのが現在オーダーしても半年ぐらい待たないとできない。自分の商品が強い商品ならわざわざ北加賀屋で降りてまちを辿ってこの店まで来ます。「MASK」(MEGA ART STORAGE KITAKAGAYA) は 2014 年から財団の事業としてやっています。大きな作品はつくるのはいいが置いておく場所がない。千島土地が財団に施設を提供して財団が無償でこれらの作品を預かるというスキームでやっています。

平成 19 年に名村造船所跡地は経済産業省の近代化産業遺産のひとつとして選ばれています。これを契機に住之江区役所がメインになって近代化産業遺産群を未来に活かす地域活性化委員会を立ち上げ、年に 1 回、造船所跡地でアートフェスタを開催しています。

最後にアヒルについてお話します。水都大阪 2009 の準備委員会で 2006 年にストラスブール、ルーブル、ナントに行きました。ナントで 2007 年からのイベントのパンフレットでロワール川河口に大きなアヒルを浮かべるというのがありました。これはひとまず私の頭の隅にしまわれてしまいました。そのあとに橋下府知事のとときに水都大阪 2009 に関わる予算がほとんどなくなって、水に関わるアート作品ができなくなったときにこのアヒルを思い出し、伝手を辿ってロッテルダムの作家に接触して中之島での展示に至りました。非常な人気を博してイベント会場にアヒルがいる時は人が集まります。この後、アヒルはあちこちに出て行きます。山本さんのお話で子供さんを大事にするということがありましたが、このアヒルを見てアートの力で感じたということを大きくなったときに思い出してもらったらいいと思います。レプリカ、Tシャツのグッズ販売も行いました。便乗してアヒルランチも登場しています。展示費用などを稼ぎ出すにはグッズ販売などもやっていかなくてはいけないかと思っています。

講演 3 「Be Creative! 過去の延長線上に未来はない」

大阪府江之子島文化芸術創造センター 館長 甲賀 雅章 氏

江之子島文化芸術創造センターの館長の甲賀です。まず江之子島文化芸術創造センターの活動をご紹介します、次に一つの事例として私の地元の静岡で今年 25 年を迎える大道芸ワー

ルドカップ in 静岡のお話をしたいと思います。

私がいろいろなことを考えるスタンスは Be Creative! ということです。江之子島のスローガンにもなっています。5 年前から我々のチームが指定管理で運営しています。Be Creative! とは “従来の概念とか仕組み、価値観にとらわれることなく、物や事に新しい意味を与えることである”。何かを壊して新しいものを創造する。何でも壊すということではなく、まず今までの過去の延長線上でいいのかという疑問符を持つということです。その時に一つ大事なことはいかに未来における成果を最初に設定するかということです。フェスティバルなどの事業は自然に大きくなることはない。最初から大きいことを描いてそこへ目指していくという方法をとらないといけない。いろいろな事業を見ているとこういったインパクト、アウトカムを設定せずに行われている事業が多いと感じています。

江之子島は 2012 年にオープンし、今年で 5 年目になります。たんに現代美術を見せる美術館的な施設ではなく、クリエイティブな発想で地域や社会の課題を解決できるハブ的な機能を持った館になっていこうと思って活動してきています。

当初にビジョン、ミッションを設定しました。ビジョンとしては Be Creative! の精神で大阪府が抱える問題や課題を解決することを目標としました。具体的な事業の一番目は幅広い文化・芸術を創造振興する、様々なその文化芸術に関わる人々がここを訪れる、府民に気軽に触れられるようにする。二番目は都市魅力創造、大阪府あるいは西区というエリアの都市の魅力を江之子島文化の活動で少しでも高められないか。三番目は教育・次世代創造、アートで子供たちの情操教育を高めていく。四番目は新しい産業を創出する。五番目が交流・発信、バラバラに点在をしているクリエイター、団体が江之子島で交流し、それらをつないでいく。六番目は社会実験事業、行政のいろいろな課題をクリエイティブに解決していく。いま安威川ラボということをやっています。ダムを契機に安威川の環境を見直していくという社会実験です。

フェスティバル、アートイベントをとにかくいろいろやってきましたが、実は 3 年程前から総花的ではなく、地域や社会の課題をクリエイティブに解決する拠点であることを江之子島文化芸術創造センターの一番のミッションにしようと考えました。一つは Enoco の学校をつくりました。市民が動かないとまちは活性化しない。ただ彼らはまちを活性化する、何かを企画するという教育をあまり受けていない。そこで毎年 25 名ぐらい、一般の社会人、学生などに企画、ソーシャルデザイン、プレゼンテーションとはどういうことか 1 年やって、最終的にはプレゼンテーションをしてもらおうということをやっています。2 年前の授業での提案で「大阪おせっかい研究所」というものが生まれました。会社員の方が会社を辞めておせっかい研究所の所長を名乗って何とか食べていこうと積極的に活動をしています。もう一つ、江之子の相談事業を始めました。広く募集すると際限がないので、まずは行政が抱える課題としました。これを行政に PR すると、すごく相談に来ます。ゲストのプロを呼んでアドバイスをしていく、必要ならばクリエイターを紹介するというところをここ 3~4 年やっていて、これはいろいろな意味で成果が上がっています。

行政の中でクリエイティブということ、デザインというものが必要だろうと理解する人が増えてきたことになります。今年はさらに行政の公共のデザイン、これをデザインしなおすことをやっています。印刷屋とかではなくデザイナー、クリエイターが関わるとコミュニケーションレベル、デザインレベルが変わるということを実証するための事業です。今までいろいろ積み重ねてきて、さらに次のステップへ行こうと思っています。

大道芸ワールドカップ in 静岡は1992年にスタートし今年で25年です。これはどういうクリエイティブ思考で始めたか。たんにイベントをやろうと思ったわけではありません。静岡は大阪と違って誇るべきあるいはPRするような伝統芸能はあまり残っていない土地です。ですから新しい文化をつくってしまおうという発想です。1992年から静岡の50年後を見据えたときに「大道芸と言えば静岡」というように大道芸を静岡を代表する文化にしてしまおうという大胆な発想で始まりました。50年先のアウトカム、インパクトを設定し新たな文化創造都市の恒常化を実現する戦略だったということです。

25年経って一番感じているのはまちが劇場になったということです。施設は全く使いません。大道芸ですから商店街、公園で4日間、大道芸人の方々が静岡に来て街角で芸をします。そうするとまさにまちは劇場になります。まちは劇場というのは実は28年前に立てたコンセプトで、大道芸を25年やりました。そうしたら市長が今年から静岡市の中心政策を「まちは劇場化プロジェクト」にしました。行政も「まちは劇場」という言葉を盛んに使うようになりました。

大道芸で小学校の校庭を使うと人でいっぱいになります。大道芸と言っても我々が呼んでいるのはレベルが高い、アーティスティックなものです。例えばバーティカルダンス、ビルの壁面で垂直にダンスをする。町のど真ん中のビルでやっていて下は歩道です。日本では場所を借りるのが一苦勞ですが、ビルのオーナーが「よし」と言えばやっています。大きな公園では自転車に乗った人間が人間モビールのようにクレーンでかなり高くつられ、下には数千人の人がいて見上げている。大きなカンパニーは予算もかかるので5年に1回とかになります。今年は25周年でアーティストの数が過去最大で108組、海外から30組ぐらい、あとは国内からで、多くのアーティストが静岡に集結します。開催は4日間、市内に30か所の演技をするポイントがあります。

なぜ25年も続いて人気になっているか、一つには質の高さで、このレベルのアーティストは静岡でしか見れない。あとは数も非常に多い。そしてワールドカップコンペティションである。そこには14組しか参加できません。我々が海外のフェスティバル、アーティストのマーケットに行って選んでくる。25年前からコンペティション部門があった。初年度からワールドカップと大胆に言ってしまった。ワールドカップを越えられるものはなかなか出てこない。最初にどういうインパクトを持つのが大事だと思います。駿府城公園でもやりますが、最近、城跡の発掘工事を始めたので来年はプレミアムステージができないというのが最大の悩みになっています。

大道芸を選んだのは別に江戸時代、あるいは今川時代に大道芸人がいたからではありません

せん。データを分析すると静岡人は劇場に足を運ばない。そこで静岡野外文化祭という実験祭をやりました。コンテンポラリーダンス、ストリートシアター、大道芸、音楽のライブをまちの中に解き放ちました。すると遠巻きながら人が集まる。お金を出して劇場に行く習慣がどうも静岡人にはないのではないか。であれば見ざるを得ない状況、聞かざるを得ない状況をつくってアートは素晴らしいということを理解させよう。そして徐々に劇場に足を運ぶようになればいいという戦略をとりました。それは功を奏して、劇団 SPAC という公立の劇団の世界演劇祭とうまくリンクするようになってきました。劇場にも足を運ぶような世代が増えてきた。

我々はアウトカム、評価、成果を最初から設定しています。まず一番目は市民意識を高める。市民がいかに参加できるかという意識を持たなければいけない。もう一つは文化芸術に対する理解度を高めていく、見ざるを得ない、聞かざるを得ない状況を作っていく。三番目は市の税金も使っているので経済にも波及効果がないといけない。最終的には芸術文化の創造都市を目指すということを 25 年前から言っています。2 年前にようやく静岡市が創造都市ネットワークに加盟をしました。我々のやってきたことを評価しそれを政策として取り入れました。

では社会的なインパクトはあったかと言うと市民の意識が変わりました。静岡の市民は踊らないと言われてきました。浜松との大きな違いで、浜松はめっちゃ踊ります。これが成果としてすごく出てきました。このフェスティバルは全員がボランティアです。プロデューサーの僕もボランティア、年間動いている 150 人もボランティア、当日は一千名ぐらいの市民が登録をします。企画から運営まで市民だけではないですがボランティアが運営している。いまボランティア組織の限界を感じています。フェスティバルが大きくなり国際化されて海外から招へいされても行けません。でも静岡市民の意識は確実に変わった。ボランティアで育った連中が違うフェスティバルを始めています。新しい資産になっています。4 日間で 100 万人を超える人が来て経済波及効果は二十数億円という数字があります。ホテルはいっぱい、JR は満車、飲食、百貨店も潤う。それ以上に大きいのは、わざわざ静岡に降りなかった人が静岡で降りてまちの魅力を知ったことです。ホスピタリティ度が高い都市だと言われます。

それから市民のクラウン、道化師が 400 人いる。2 泊 3 日の大道芸カレッジがあつてプロがメイクの仕方から歩き方まで教えてそれを卒業しないと当日道化師の衣装を着させないというルールです。世界の中で初めてクラウン都市宣言をしようという動きになっています。教育的なインパクトもあります。中学生から 70 代までがフェスティバルを支えていて世代の違う人が一緒にいる。そこからいろいろなことを若者たちも学びコミュニケーション能力がアップする。文化的なインパクト、アートの一つの効果は多様性を認め合うことです。多様なものを静岡の子供たちは小学校の頃からずっと見ている。そこからいろいろなことを学んでいると思います。先端的なことをやってもそれを受け入れられる許容力、受容力がすごく高まっています。地元からアーティストが育ち始め NPO をつくってワーク

ショップを自主的に開催している。NPO が商店街と警察協議に行って許可をもらっている。

都市の国際化が静岡市で起きています。大道芸の世界ではヨーロッパ、アジア、みんな静岡を知っている。海外から僕が招へいを受けたり、海外のアーティスト、ディレクターを招待したり民間レベルでどんどん交流が起きている。パフォーミングアーツは新しい観光資源になると思います。実際にホテルの外国人の宿泊客が増えています。パフォーミングアーツを見にわざわざ来ている。結果的には観光・経済的資源になっています。

ボランティアの集め方が面白くて全部職種に分けて募集しています。自己実現の場なので通訳は通訳、広報は広報で募集します。ドイツ語を活かして通訳ができるというように仕事を何十種類に分けている。ごみを拾うのが天使の羽部隊ですが、ずっとごみを持ち帰ってください、分別してくださいと言ってきているのでごみが出ない。そこに若者が集まってきます。社会課題を解決したいという思いを持っている若者たちがいるということになります。ごみのリサイクル率 90%まで持ってきました。生ごみをたい肥化する活動もしています。イベントを通してごみの問題、環境の問題にメッセージを送れるようになっていきます。今年は 11 月の 3 日から 6 日まで 4 日間開催しますので、みなさんもお時間があればぜひ来ていただきたいと思います。

パネルディスカッション

角野： 3 人の方のお話をお伺いし共通した点があると思いました。皆さん企画力と実行力があって、しかもつなぐ力、引き付けていく力をお持ちです。企画にはセンスと魅力が必要です。それを実現、実践されている。そのパワーと実行力というのは素晴らしい。いろいろな人たちを巻き込んでいく、引っ張っていく、繋いでいく、そういう力も非常に強くお持ちだとあらためて感じた次第です。

論点を 4 つ用意しました。一番目は大阪の文化資源をもう一度見つめなおしていくと何か発見できるものがあるのではないか、新たな魅力として作り上げていけるものがあるのではないかという「文化資源を見つめなおす」という論点です。二番目は単体の資源ではなく、それを組み合わせることで、繋いでいくことで新しい魅力や価値が創造できるのではないか、どのような資源をどのように繋いでいけばいいか。三番目は大阪の都心部でどんな活動をどんな場所でやっていると大阪の価値が高まっていくだろうか。四番目は、それを実際に動かしていくためには、誰が主体となって、あるいはどういう組織でどう協力していけばいいのかということです。また、梅田あるいは中之島の地区で何かをすればどんなことを期待されるかも最後にお伺いしたいと思っています。

まず、論点の一番目と二番目をまとめて、大阪に隠れているどんな資源があるか、それと何かを組み合わせ繋いでいくことで新しい価値が発見できるのではないか、ということについてお話しいたきたいと思います。

山本： 初心者のための上方伝統芸能ナイトという公演が私たちにとって大きな転機になりました。能、歌舞伎、文楽などはお昼の公演がほとんどですが、夜に行くことでお仕事帰

りなど同じ世代の方に見ていただきたいと思いました。当時、商工会議所が大阪ナイトカルチャー事業を進めていて、大阪は実は芸能の都ではないかと潜在的なところを見つめなおすことで生まれました。また芝川ビル様をはじめとする船場近代建築ネットワークの皆様と出会い、商工会議所が連携してくださり、船場が大阪屈指の歴史と文化の宝庫の町であることを一緒に発信できることになりました。出会いがなかったらどちらのイベントも生まれていなかった。小さなきっかけからいろんなことが生まれます。これは大阪という町が、人がたくさんいて、人と人の距離がすごく近いことにあるからではないかといつも出会いに感謝しております。

芝川：最初、山本能楽堂でやったクリュッグという高級なシャンパンのパーティを名村造船所でもやりました。1食6万円ぐらいのセレブ的なパーティで10日間程やりました。八光モーターズのアストンマーチンのGT10という新車の発表会もありました。「こんな場所で！」という異空間を使ったイベントです。

この春、国立国際美術館で森村泰昌さんの展示がありましたが、その撮影はほぼ名村造船所跡地で行いました。ゴッホの「アルルの部屋」のセットを作って、森村さんがゴッホに化ける。話が大きくなって森村さんは造船所跡から外に出て町並みの中でも撮りました。場の力で創造力が増えていった事例ではないかなと思います。

また、大正区から住之江区、港区を繋ぐシティロゲイニング、沿岸部をアート資源で繋いでいく。今年、新たな試みとしてやってみたいと思っています。

甲賀：目標を明確にしないといけないと思います。大阪の文化資源を活用しようと言いますが、大阪の何を解決したいのかを明確にしないと手法はついてこない。方法論から語り始める。何を達成したいのか、そのときに手法として文化を使うのか、芸術を使うのか、食を使うのか、後からついてくる。そうではないところで論じてしまうのがまちを活性化するときには陥りやすいところです。

もう一つ、我々は本当に大阪の資源が分かっているのか。自分が知っている範囲では語るけれども、それはすごく限られる。大阪はそんなものではない。大阪の方が気づいていない魅力もある。一度ちゃんと洗うことが大事だと思います。今やっておかないと次の大阪の方向性は見えない。その中から大阪は何で勝負していくのか明確にしていく。

オリンピックの文化プログラムという話がありますが、あれもアウトカムを考えていない。イギリスではちゃんとアウトカムがあった。オリンピックで世界中からいろいろな人が来る。イギリスが目指している姿、クリエイティブ産業の最大輸出国になろうというのを見せるということで文化プログラムが始まった。それが尺度、軸になっているいろいろなことをやった。今の大阪にはそのような軸がないと思う。それをちゃんとつくって今までの文化、芸術、食などをくっつけていくという方法をとらないといけないと感じています。

大阪人は出たがり、目立ちたがりと思っておりましたが意外とそうでもない。シャイということに気づきました。水都、食文化などいいものがいっぱいあるが関東寄りの人は知らない。大阪に来ていろいろ連れて行ってはじめて分かる。大阪の人はみんな「水都

あるぞ！」と言わない。もう少し前にアプローチしていくように変えないといけないと思います。

繋ぐということは江之子島の大きな役割だと思います。いろいろなイベントを行うとそれぞれのポテンシャルはすごく高い。でも全く繋がらない。繋いでいく仕組み、役割を江之子島が果たしていけばパワーが倍増していく。これは我々の一つの大きな課題です。

角野：ステレオタイプ化された大阪のイメージではなく、もっといろいろまちの中にいっぱいある、ユニークなものがある、それを発掘しあるセンスで繋いでいくと新しい価値が3倍にも4倍にもなるという仮説を考えています。甲賀さん、大阪の魅力としてこんな素材があるのではないかということをお話していただけないでしょうか。

甲賀：大阪は人がおもしろい、本当に興味深い。大阪は人という仕組みがうまくできると面白いと思います。もう一つ、これは前からずっと言っていますが何故ミニ東京にしようとするかわからない。例えば大阪の資産として徹底的に近代建築を守り続けるという柱があったら近代建築のメッカになる。でもどんどん壊している。すごくもったいない。

山本さんにお伺いしたいのですが、上方が持っていた粋（スイ）の文化、これを一度ちゃんと定義づけて掘り起こすべきだと思います。江戸の粋（イキ）とは違う大阪の粋（スイ）という文化は何なのか、もう少し明確にしていったら大阪の方向性が見えるのではないかという気がしています。

山本：私は実は京都の生まれ育ちなのですが、大阪は戦争で焼けてしまって本当にもったいないと思っています。大阪の方がお客さんも多く花街があってお座敷文化、長唄や浄瑠璃も盛んでした。一昔前の大阪はちょっと路地を入ると芸能の音が聞こえる風情のあるまちだったと聞きます。上方舞、文楽などが残っていますが一部の方の趣味となっていて、それが似合う場が大阪にはありません。能楽堂がある谷町4丁目は元々武家屋敷の地区なのですが、そういう記憶がまちに何も残っていません。船場の取り組みにご一緒させていただき、それが船場のまちにはすごく残っていることを学びました。まだ残っているのをそれを学び直して現代に組み直して伝えることが出来れば上質なまちが再生できると思います。

角野：山本さんから船場のお話がありました。甲賀さんは江之子島という大阪の近代化が始まったところを拠点にしておられます。芝川さんは近代建築を活用されるとともに、大阪の産業の拠点であった港湾部が産業構造の転換で遊休地化したところで場のポテンシャルをとらえて新しい取り組みをやっておられます。そういう場の議論として大阪のどんな場所にこれから注目すべきでしょうか。

芝川：大阪は川の文化です。治水対策で防潮堤をつくっていますが、安治川と木津川に馬蹄形の水門があります。あの下に絵を描いたらどうかと言っています。シートで貼る。その絵は船からしか見えない。日本、世界でそこでしか見れないものをつくれれば必ず注目を浴びると思います。もちろんそこそこ有名な作家を選ぶ。名村造船跡と中之島あたりを船で結んでイベントをしています道中の魅力になると思います。

角野：山本さんは能楽堂をいろんなふうに使って、逆に能をいろんな場所で展開しているんじゃないですか。その場合、どういうことに注目されているのでしょうか。

山本：能楽堂の改修の際にデザイン集団の grafさんと設計の安井建築設計さんと3年間、過去のことも、次のことをいろいろ考えました。その中から人が交流する場、社交場の機能をもう一度取り戻すという改修のコンセプトが生まれました。能楽堂を使用してイベントをしたいというお申しでもたくさんいただくのですが、能楽堂をリスペクトして使って下さり、能舞台に足袋を履いて上がるなどのルールを守っていただければ比較的自由にお使い頂いております。

ストリートライブ能はこれまでに100回ぐらい大阪市内の公共空間でやらせていただいています。水辺や商業施設、駅や公園など、いろんな場所で開催させていただくことで、経験値が高まり、お互いが映える、美しく、魅力的な都市空間を演出させて頂き、ご覧いただいた方に「大阪って文化度の高い、美しいまちだなあ」と思ってもらえることを目標に活動を続けています。北浜の平和不動産のビルのテラスは竣工前から使って欲しいと言ってもらって、ようやく先月、水都大阪パートナーズ様のご協力で実現しました。

また、能は約700年前の室町時代にできた演劇ですが、その時代の最先端の芸能でワクワクすることがあったから、今まで伝えられ、上演され続けてきたと思います。時代の最先端の思想を内包する現代美術ですが、全く異質と思われがちな700年前に大成された能と出会うことで、時代に即した新しい美意識が構築されると思っています。能が現代美術と結ばれることで、古典であっても今の時代の新しい息吹が注ぎ込まれ、美の相乗効果が生まれます。感謝の気持ちを持ちながら一緒に仕事をさせていただいています。

角野：甲賀さん、大道芸をやりやすい場、やれば場の魅力がもっと高まるというようなことはあるのでしょうか。

甲賀：どんな場所でも別にいいと思いますが、問題は規制です。例えば道路で火を使ってはいけないといったことです。この間行きましたが韓国は規制が全くない。13車線の道路を止めます。基幹道路を止めて、子供たちが道路いっぱいに絵を描いて、最後はそこで火と花火のパフォーマンスというようなことがソウルでは行われています。彼らはストリートシアターという文化をソウルの人に触れさせることを最大の目標にしている。経済効果と言ったことは考えず、先端をやるために規制を緩和している。場所よりも市民や行政がどこまで受け止められるかです。

静岡はだんだん大きくなって知らない間に認められているような感じです。例えば警察に「ダンスカンパニーが横断歩道を使ってやります」と言うと絶対にNOになります。でも横断歩道が青の時にしかやらなければ僕が歩いてちょっと踊ると変わらない。もう黙ってやった方がいい、それぐらいの許容力が出始めています。どこまで許せるか、それによって場所はどこでもいいと思います。

芝川：アヒルを中之島に展示するとき、必ず道路にお尻を向けます。顔を向けると運転手がついよそ見して事故を起こすと警察から言われます。芝川ビルのデジタルマッピングも

道路を横断して光を当てると規制にひっかかるので常設的にはできません。

角野：都市再生で規制緩和がありますが、都市計画的な規制だけではなく、まちの魅力づくりのための規制緩和を考えた方が面白いかもしれません。

山本：東横堀川を活性化する協議会では事務局の方が規制緩和に頑張られて、できないと思っていたことが次々にできるようになりました。いろいろ働きかけて本町橋に船着き場をつくることになり、さらにその護岸の部分に一時的な試験期間でしたが舞台をつくりました。お能で舞台披きをし、水都大阪の52日間にいろいろなイベントをしました。住民が団結することで不可能が可能になり、また一人一人が強制的ではなく自発的にできることを持ち寄ることで、大きなジャンプができることを学ばせていただきました。

角野：最後になりますが、新たな文化的な活動をしていく体制、組織について、組織化し動かしていくあるいはみんなに伝えていく工夫が重要だと思いますが、そのような工夫、課題についてお教えてください。

甲賀：大道芸の場合、25年経って岐路に立っています。自分はボランティアでやってきていてすごく時間を取られ海外にも行きますが収入はない。早く譲りたいのですが、そういうふうに分ける人が次の世代にいません。そう考えたとき、フェスティバルのプロデューサーはしかるべきお金をもらうべきだと思います。日本ではそういう習慣性が薄いのですが、静岡市ぐらいなら本来、まちのプロデューサー、芸術監督のようなポジションの人がいてもおかしくない。ディレクター、プロデューサーにちゃんと生業としてお金が入ってくる仕組みをつくるというのが新しい一つの手法だと思います。

もう一つはやりたい人をどう募るかです。まちづくりの委員会はどこでもほとんど同じような人が出てきて同じようなことを言います。そうではない人をどう引き込むか。岐阜で5年ぐらい宝物プロジェクトをやりました。観光立県を進めるうえで鶴飼いななどだけではなくもっと何かあるはずだ。そこで各市町に自慢の原石をプレゼンテーションさせるという仕組みにしました。最初の年には小さなものも含め千何百件来ました。皆さん一所懸命にプレゼンテーションをする。それを吟味して宝物の原石認定をしてお金を付ける。そうしたら地歌舞伎の小屋が岐阜県に集中してこれはすごいということになった。宝物になったらみんながこれを磨く。今は海外からどんどん招へいされて岐阜の一つの大きな観光資源にまでなっています。従来の仕組みではなく、実際の当事者がどんどん関わるという方法論をとっていかないといけないと思います。

芝川：2011年に「おおさか創造千島財団」を設立しましたが、財団に関しては、金は出すが口は出さないということで、アートや芸術についてはできるだけ若い人に任せていこうと考えています。「ピコ太郎」はジャスティン・ビーバーが紹介しただけで何億人もの人が知るところになりました。一方でいろいろな人がいくら宣伝をしても誰も振り向かない。ネット社会の怖さもありますが、何らかの形で利用する手もあるのではと思います。

山本：出会いが一番大事だと思います。いろいろな人と関わることでいろいろなアイデアが生まれます。先ほど申し上げたように、3年間の改修工事をした時のコンセプトは「開か

れた能楽堂」でした。いろんな人に場を開放して、いろんな方にこの場所を使い、楽しんで頂くことで、多様な人が交流し、新たな視点が生まれていくのではないかと考えています。能は 700 年間変わらなかったのではなく、時代にあわせて変化してきたからこそ存続してきたのだと思います。日新たに、日々新たに、その時にできる最良の事を努力して、積み重ねていければと思っています。

角野：そろそろ時間となりました。ディスカッションの最初の方で甲賀さんから、文化と言うのもいいが、どんなまちにしたいのか、どんな魅力を高めたいのか、どんな課題を解決したいのか、目的をまずはっきりさせて、未来におけるインパクトを設定しないさいというお話をいただきました。非常に重要なことだと思います。都心の活力を高めるというような抽象的なことではなく、もう少しブレークダウンしてしっかり目標設定する必要がある。そのうえで文化資源をどう見つめ直すことができるのか、あらためて議論しなければならない。文化とまちづくりというのは古くて新しい課題で、今またブームのようになっています。それと似たような言葉で都市格という議論があります。また、シビックプライドという言葉もあります。その言葉を使ってまちをどうしたいのか、やはり明確にすべきだとあらためて感じました。

冒頭でいくつかの論点を申し上げましたが、その通りには進まなかったことをお詫び致します。しかし、今日はそれ以上にいろいろな切り口のお話をいただいたと思います。ありがとうございました。